

遠くから見れば……

柳原 孝敦

過去3号ほどを特集主義で編集してきた『れにくさ』だが、今回、初心に還り（といっても、私はその「初心」のころを知らないわけだが、たぶん、初心に還ったのだと思う）、大学院の主に博士課程の学生のための投稿の場としての機能を強化することにした。具体的には査読制としたのだ。大学院も博士課程ともなると、学生はアカデミックなキャリアを得るために業績を稼がなければならなくなる。博士論文を仕上げ、それ以外にも雑誌に論文を掲載し、ひとつひとつ積み重ねていく。雑誌掲載論文は査読つきと査読なしでは断然、前者がポイントが高い。査読つきの雑誌に論文を掲載するのがいいに決まっている。博士課程の学生を相当数抱える研究室としては、やはり査読つきにした方が学生たちの将来のためにも望ましいとの判断だ。今号の投稿論文は匿名による厳正な審査を経て掲載可とされたものばかりだ。

さりとて、特集がないのも寂しい。そんなわけで今号には小特集としてニカラグアの詩人ルベン・ダリーオを取り上げた。2016年は詩人の死後100年の記念の年だったのだ。

ちなみに、2017年は同じ詩人の生誕150年の年でもある。果たして次号も（小）特集を組まなければならないのだろうか？

組むか組まないかは今は措くとして、こうして没後100年、生誕150年と文字にしてみれば、既にわかりきったことではあるけれども、スペイン語の詩的言語を刷新したとされるこの詩人が50歳にならずして死んだことに改めて驚かされる。詩人は早死なのだ。

20歳になる少し前、出版されたばかりの村上春樹『中国行きのスローボート』（ビョルン・ボルグの引退の年に出たことで記憶に残る——オビにはそう書いてあった——村上春樹初の短編集）に所収の「ニューヨーク炭鉱の悲劇」に不穏な言葉を見出したことを、今でも鮮明に覚えている。「詩人は21で死ぬし、革命家とロックンローラーは24で死ぬ」というものだ。

詩人アルチュール・ランボーは、筆を折ったのは20歳くらいのことだったとはいえ、30歳代後半まで生きている。革命家エルネスト・“チェ”・ゲバラが死んだのは39歳。ロックンローラー、ジミ・ヘンドリックスが死んだのは27、8歳のころだった。ジム・モリソンも同年くらいだった。であれば、ここで示唆されている詩人や革命家、ロックンローラーとは誰のことだろう？ そう不思議に思うと同時に、詩人でも革命家でもロックンローラーでもなくて本当に良かったと胸をなで下ろしたものだ。あと5年以上は生き延びられるかもしれない、と。

村上春樹の予言に恐怖した日から30年以上の月日が過ぎ、同じ作家の『騎士団長殺し』の読書を中断してこうして「巻頭言」を書いている私は、既にダリーオの死んだ年齢を超えているわけだが、今はまだ死ぬのは怖い。ダリーオの生没年を思うと、まだまだ戦慄が走る。

ところで、ダリーオとも面識のあったホセ・マルティは詩人であり革命家でもあった人物だが、彼は42歳で死んでいる。掛け合わせると余計に早くなるようだ。

マルティを「キューバの使徒」と呼んだフィデル・カストロは、彼も革命家だが、2016年、90歳で大往生を遂げた。……とりあえず、村上春樹の予言に根拠はないようだ。たぶん。少なくとも当たってはいない。

村上春樹などを引き合いに出したものだから、ひとつ気づいたことがある。新作『騎士団長殺し』の各章のタイトルは章内の文章から抜き出したものになっているのだが、そのうちのひとつに、『1973年のピンボール』の中の一文とほぼ同じものがある。『騎士団長殺し』のその章のタイトルを目にしたとき、何か心に引っかかるものがあった。今にして見ればありきたりなものではあるその命題が、何かを語りかけてきた。それが何なのかすぐにはわからなかったけれども、この文章を書いていく過程で思い出したのだ。17歳の私にはその文章が新鮮に響き、感心し、これを読んでからしばらくの間、私は折に触れてその一文を口に出していたのだ。

失われた連環を、村上春樹は読んだこともなければ名前も知らないだろう遠いニカラグアの詩人が、こうして見つけ出してくれた。遠く離れてみれば、何かが見えることがあるのだろう。